

駒の館だより

明治鍼灸大学図書館報

第 6 号

昭和62年3月31日 発行

明治鍼灸大学附属図書館

〒629-03 京都府船井郡日吉町
TEL. 07717-2-1181 (代)

這えば立て、立てば歩めの親心

図書館長 武田 創

這えば立ち、ついで歩むと言う動作は、脳髓が最も急激な発達を遂げる2~4才に先立って起る事は甚だ意義深いことで、爾後小児には知覚や運動の面での種々な成長、それにともなう経験が控えている。それらに対する準備と言うか、刺戟にもなるのであろう。

親心は「這えば立て、立てば歩め」までではなく、最近では、その親心は大学の入試は勿論、卒業、ついで就職にまで延長している。

さて成長、発展の経過をマクロ的に見ると、①段階的なもの、と②連続的なものがある。

標題の現象等は前者に属し、之が次の段階への飛躍をもたらすこととなったり、人は器に従って大きくもなり、小さくもなり、あるPOSTにつけば、最初はそれが無理と見えてもやりこなせるようになる。人材登用の要でもある。

後者は徐々に連続的に発達成長し、若干の時間的推移の後で、それが認識されるものである。大学の経営で見れば、前者は学部の増設や建物

の増設であり、後者が教育・研究の面であらう。

さて、私の関係した図書館について見ると、図書館の発展も後者の部類に属することとなる。毎年の限られた恒常的な予算の下に経営されるservice 機関であるため、飛躍的な階段的な発展は望むべくもない。

しかし、本邦唯一の鍼灸医学を講究する大学の図書館として、その使命はいろいろあるが、先づ鍼灸に関する古今東西の文献を蒐集することであり、それは玉石混着でも致し方ないことであらう。ついで学生の西洋医学へのアプローチを可能な限り援助するため、本来の鍼灸に関する参考書の他、開架方式の学生用参考書を増加させることであり、また教員及び研究者の便宜を兼ねると共に、図書紛失防止のためにも図書館内に個人単位の図書室(キャレル)数名分を設置することである。

之の実現は図書館における小さな唯一の段階的発展であらう。



図書館に期待すること

生理学教室 岩瀬 善彦

図書館は大学の顔である。大学の図書館をみれば、その大学の評価ができる。このように大学図書館の蔵書は大学の活動と活性化への一つの尺度となる。

本学は我が国初の鍼灸大学で鍼灸関係の蔵書が多いことは勿論である。そこで図書館に次のことを要望して本学の教育と研究の発展を期したい。

1. 良書の選定について

一般に書物は一般向け書物（一般書）と専門書に分けられる。一般書は安直に出版されるものが多い。また専門書でも鍼灸では新しい理論や発明・発見の類も多く、また従来の学説に批判的で独善的な書物も多い。また「経穴の位置について百家争鳴、百人百説で共通の基準がなかった」という。臨床面では「著者の治療法は万病にきく」とか効能を書きたてた実例主義が多く、統計的な有効例まで記載した書物は少ない。このことは鍼灸が学問としての体系化が未だ充分でないからであろう。なお、現代医学の中にも一般向けの通俗書の類が含まれているように思う。

現状では止むを得ないかと思うが、段々とよい方向に歩んでいきたい。どの分野でもすぐれた書物について「読書百遍、意自ら通ずる」（森本教授、駒の館だより、第2号、昭和58年

3月）の精神は学生のみならず教職員も範とすべきことである。

2. 図書のコピーについて

本学は都会から離れ、本屋も遠い立地条件下にある。小生は学生に機械的なコピーよりも頭脳に機能的にコピーするようすすめている。これは無料で、頭の回転に役立つからであるとは云え、現状コピー機の利用も多いので、多少とも安価にならないものであろうか。

3. 図書館の利用について

図書閲覧室方式は古いタイプの利用法である。本学の現状をみると主として学生の利用率が高いことは喜ばしいが、一歩進めて質疑応答や学生間の交流の場を設けられないか、一寸したことで学生の勉学意欲の向上が得られないものだろうかと考えている。



宝の山を前にして

臨床医学教室 神川喜代男

図書館の蔵書が毎年増えてゆく。ずらりと書架に並べられた様々な本を前にすると、宝の山の入口に立つ思いがする。しかしこの豊かな宝の山に道に迷うことなく踏み分けてゆくには、いつも戸惑い、しばらく躊躇うものである。4年前に東洋医学の勉強に取りかゝる時もそうであった。その折、解剖学教室の熊本君が間中喜雄著、「針灸の理論と考え方」創元社を薦めてくれた。この本から日本の針灸の動向の一端を窺うことができたが、針灸の峰々はなお厚い雲に包まれたまゝである。そこで陳舜臣著「中国の歴史」15巻、平凡社を読んだが、これは長濱善夫著、「東洋医学概説」創元社を理解するのに役立った。

その後戴内清編「中国の科学」中央公論社を読んだが、東洋医学概説よりは平易な針灸の手引き書で、学生諸君に一読を薦めたい本だと思った。

岩瀬教授からは Felix Mann 著、西条、佐藤、笠原訳、「鍼の科学」医歯薬出版を薦められた。Mann は随分と大胆な考え方を述べているので、こゝに原文の一部を抜粋しておこう。

…… I Knew what the ancients said, and

also what was preached in this century in the East and the West. It was only then that I seriously examined the validity of all I had learnt, only to discover that most of it was phantasy. …… Yet acupuncture works—indeed I practise it nearly 100 per cent of my time. ……

最近では生物学関係の書物が目につくようになった。その中の一冊で、「分子生物学ABC——細胞で何が起っているか」化学同人は、The Games Cells Play—Basic Concept of Cellular Metabolism の訳本である。この本では訳者のことばのところで興味をそらされたので、そのさわりの一節を紹介しよう。

…… 基礎知識もいらない、努力も必要としない、しかしなんとか代謝についての基礎知識は頭に植えつける、まさに米国ならではの教科書といえましょう。……

わたくしの机の上には、いつも数冊の講談社の Blue Backs が置かれている。上平恒著「水とはなにか」、大木幸介著「量子生物学」など

である。これらの小冊子は定価は数百円で、手許に置くことのできる重宝な本である。しかもわたくしにとっては、バイブルのようなものである。

「駒の館だより」第6号への寄稿の依頼を受け、とりとめのない感想を述べてきた。さてここでそろそろ拙文を締め括らねばなるまい。

図書の利用の際、借出簿に署名するが、こゝで紹介した図書館の蔵書に関しては、それらの借用人数があまりにも少ないのに驚き、また悲

しい思いがする。戦後の乏しかった図書館の蔵書のことを思えば、恵まれ過ぎた環境にある。しかしこの豊かさにどれ程感謝し、大切に利用しようとする心が、わたくし

たちの胸のうちに果して息吹いているのだろうか。

この宝の山を持ち腐れにしないには、一体どうすればよいのであろうか。



境界領域学としての鍼灸医学

東洋医学臨床教室 森 和

鍼灸医学は、診断・治療のすべての過程で、“手”を活用するところから「用手療法」（手当療法）の呼び名がある。

病気の原因をさぐり、原因除去を治療の目的とする西洋医学に対して、鍼灸医学は心身一如の病人を対象とし、病人のもつ自然治癒力を最大限に活用しようとする間接治療（体性一内臓反射療法）の方式だけに、“治療者—病人関係”という「場」が重視される。むしろ、ボディタッチ（手当）でえた「良好な治療者—病人関係」という場が治病機転を促進する重要な要因になることを数千年の経験を通して把握し、「場」の上に独自の体系を築いてきた医療といえる。

西洋医学と鍼灸医学の根本的相違は、治療手段にある。鍼灸という微細で緩和な治療手段を用いて病人の症状の緩和と機能調節を行なうところに医療としての特色がある。治療の目標は、あくまで治病機転がスムーズに働き出すように、不完全な防御反応は強めてやり（補法）、過剰な反応は抑制して（泻法）、生体反応を正しい方向（気血の調和）に導くところにおかれる。

現代医学の強力なエネルギーによる治療法（薬、メス等）にくらべて、ごく微細なエネルギーをもつ治療法だけに、鍼灸治効のメカニズムの解明は非常に困難である。

この困難な課題にとり組み、「鍼灸医学の客観化」を計るには、鍼灸医学を現代医学を含む関連諸学問の境界領域に位置する新しい学問（科学）としてとらえ、学際的アプローチを行なうこと

が必要である。学際的アプローチに共通する手法は、要素還元主義的アプローチとホリスティック・アプローチとの“相補的アプローチ”である。

旧来の学問は日本の大学教育における学部学科編成で代表されるように、まず文科と理科に大別され、理科は自然科学系、文科は社会科学系と人文科学系に分かれる。自然科学系はさらに基礎科学と応用科学に区分され、応用科学の代表として医学、工学、農学などがある。旧来の学問は、どの学問をとりあげても1つの専門領域が確立されるまでに長い歴史をもっている。四年制大学が誕生して間もない鍼灸医学を旧来の学問の中に位置づけるには問題が多い。この旧来の学問に対して、新しい学問（科学）は、旧来の学問体系を横につなぐ形で成り立っている。つまり、異種学問間の壁をとり払い、相互に共通する問題を取りあげる学問（科学）であることが旧来の学問と根本的に異なる。当然、新しい学問があれば、それを支える学問として旧来の学問があるという構図となっている。代表的な学問に、行動科学、数理科学、生命科学などがある。

鍼灸医学をホリスティック医学、境界領域学としての要素をもつ学問としてとらえると、新しい学問の中に位置づけるのがむしろ妥当である。

鍼灸医学に関連の深い学問として現代医学は勿論のこと、歯科医学（歯科鍼灸）、獣医学（獣医鍼灸）、スポーツ医学（スポーツ鍼灸）、産業医学（産業鍼灸）、健康医学（養生鍼灸）、

美容医学（美容鍼灸）、心理学（鍼灸心理学）、哲学（鍼灸哲学）、経済学・経営学（針灸経営学）、医用工学、レオロジー、数理科学、システム科学、情報科学、画像工学、音声学、生気象・時間生物学、情緒工学などが考えられる。これらの学問分野から優秀な人材を集め、プロジェクト・チームを編成し、学際的アプローチを行なうことによって鍼灸医学の体系化が可能となるだろう。この場合、各メンバーには共通の達成目標があり、メンバー間で十分意思の疎通ができるように共通の方法論（例、システムアプローチ）、共通の概念（例、システム、情報、フィードバック、ストレスなど）、共通の言語（数学、画像など）をもっていなければならない。高い指導力と正しい評価能力をもつ有能なチーム・リーダーも不可欠である。とくに学際的アプローチが行なわれる「場」には「若さ」と「創造性」がなければならない。可能性を信じる若さが「強力な磁場」をつくり、成功への原動力ともなる。学際的思考は、自分が理解できないものに惚れこむ心から生まれ、学際人

には、体系化が十分でないということに魅力を感じる開拓者精神の持ち主が多いといわれている。

現在、鍼灸治療が世界100ヶ国余りの国々で行われているという現状をふりかえると、「鍼灸」というユニークな治療手段は人類共通の財産となったといえよう。

人間を学問の原点にすえ、個性差をもった人間全体を多様なまゝに認識し、たえず“人間とは何か”“医療とは何か”を問いかけながら、創造的なものの見方や考え方、フィールドワーク（臨床）を重視する学問観には、旧来の学問にない新鮮な魅力がある。

現代人にとって有用な、客観性をもった鍼灸医学の体系をきづきあげるには、まず、鍼灸医学の科学的独自性（フィールドサイエンス的要素）を尊重し、たえず、何が鍼灸医学にとって、もっとも根本的であるかと問いつめながら、根本的問題について仮説構成をしつかり行ない、学際的アプローチを通して仮説検証を行なうことが大切である。



外国語書籍雑感

臨床医学教室 伴 真二郎

戦前から日本の医学にはドイツ語が盛んに用いられ、大学入学後の医学部進学過程の2年間では、ドイツ語の授業が1週間に何と4時限もあったことを記憶している。Virchowの細胞病理学に代表される優れた先人達が築いたドイツ医学の継承をわが国が行ってきたことにもよるが、戦後の医学教育は一変した。それにともないドイツ語の必要性も漸次減少したのに反して、英語のウエイトが急増した。最近ではドイツ人の医学論文ですら、母国語のドイツ語による論文よりも、英語による論文で投稿する傾向が増えているといわれている。今やドイツ語の論文や教科書を読むことは滅多になく（能力がなく）、単にカルテ用語や日常の診療上の会話に単語として登場する程度となった。必要性が少ないゆえに語学力の低下を招いたドイツ語で、最近苦い経験をしたことがある。

東洋医学をある程度知って、附属病院での診療活動に何か役立てたく、本学の図書館を利用した。いわゆるガイド・ブック的な何冊かを読んでみたが、理解するのが非常に困難である。ことに漢方に使用される虚実や陰陽の概念は、西洋医学的な教育を受けてきた者にとっては、その尺度で物事を理解するようにできているまいか、不可能に近いように思われた。本来中国や日本で受けつがれてきた東洋医学であるのに、日本人の書いた入門書的なものでも理解しがたいことに嫌気がきてしまった。それでは、と外国（欧米）人が鍼などの東洋医学に関してどのように書いているかと思い、ドイツ語で書かれた入門書を借りた。辞書を片手に読むと何となく『入っていける』感じを得た。邦人の書いたものより、外国人の書いた書物の方が何となく臆気ながら理解できるという奇妙なことは、欧

米人が合理的な考えに優れているということを証明しているように思えた。もっと普段からドイツ語を疎かにしていなかったら、と悔やんでいる。

医学に関連した最近の情報量は実に膨大であり、こと専門分野に関するものだけでも、到底個人が吸収することはできないほどである。このような現象は今後もますます増えるであろうし、科学の進歩はこのような研究成果の積み重ねでなされていることはいうまでもない。

内外の情報のうち、国内のそれには比較的目を通すようにしているが、国外の情報は語学のハンディ・キャップからか特に漏れがちである。データ収集のための方策として Key Word という便利な方法もあるが、研究題目と自分の探し求める内容とのずれが生じたことはしばしば経験している。日本人の外国語に対する苦手意識は、何ら新しい問題ではないが、国際社会で凌ぎをけずって生きていくためには、今や外国語抜きでは考えられないと思われる。自分達が受けてきた中・高校時代の英語教育と、実際、現在必要としている英語との間で、その機能性

の点においては大きなギャップがあると感じるのは私だけではないだろう。

外国語に親しむ一つの方法として、学生時代に経験したことを思い出す。医学部の専門課程では、いわゆる指定された教科書というものになかった。学生個人が自分の選んだ教科書的なもので講義や実習に出席して学習すればよかった。自分は安易な考えで当然日本語の医学書を購入、使用していたが、学生の中にはほとんど米国で使われている医学書を用いていた者がいた。ただ感心するばかりであったが、卒業後必要に駆られて専門的な書物を読まなければならないようになると、英語で書かれた教科書的なものの方が、理路整然と書かれているので頭に入りやすいのである。もう少し早くからこの様な方法を取り入れていたら、とこれまた悔やんでいる。外国語一辺倒のつもりは毛頭ないが、本学も図書館内の外国語による専門書籍の美しさ（利用度の低さ）を見につけ、それが徐々になくなって行くことを期待している。



碁に想う

自然科学教室 本郷孝博

私が将棋を指し、囲碁（以下、碁と略す）を打ちはじめたのはいつごろであろうか？さだかでない。

一般には、将棋をまず最初に覚え、次に碁を覚えるのであろう。私もその例にもれず、まず最初に将棋を、次に碁を覚えた。しかし、今は、碁は打つが、将棋を指すことは全くないといってよい。

これには理由がある。それは、今でも忘れることのできない一つの出来事があったからである。その出来事とは、私の中学生時代の兄との将棋である。兄は風呂の中で、私は居間で、すなわち、兄は暗譜で将棋を指し、私は目の前の盤をみつめながら将棋を指した。兄曰く、「どこでつませてやろうか」と。私の必死の抵抗もむなしく、兄の宣言どおりの場所で王将を取られた。くやしいが、どうしようもなかった。完敗である。以来、私は、二度と将棋を指す気に

はなれないのである。

この時、「何か一つは兄に追いつき、追い越してやるぞ」と、強く強く心に誓ったのである。

兄は長男、私は次男。兄は私より15歳も年上。このような差は、どうしても追いつけない。相撲を取ったら、いつも畳にたたきつけられる。そして、兄は医者になった。兄に追いつけそうなものは何一つなさそうである。しかし、一つみつけた。それは、父や兄がやっている碁である。これだ！よし、碁をやろう！

とはいうものの、高校受験、大学受験と追い立てられ、碁を打った記憶はほとんどない。大学（島根大学）に入学し、下宿させていただいたところのおじさん（土江氏）に碁の手ほどきを受けたのが、碁の本当のはじまりであったように私には思える。

「碁は趣味として打てばよい」。「さわやか

であればいい」。「相手の石を殺そうとは思わな」。これがそのおじさんの口癖であった。

そして、私が碁に夢中になったのは、最初に就職した島根県立隠岐高等学校の教職時代であろう。当時、碁を通じて、いろいろな方々と出会った。なかでも、私が一番お世話になった沢田先生から一冊の本をいただいた。それは、山部俊郎著、「初段への条件」である。私が碁の本として最初に読んだのは、この本であったろう。

この本には、一ヶ所だけ「ハメ手」が載っている。私は、この手を一度だけ使った。その時である。「こんなのを覚えるためにあの本をやったのではない。かえせ!!」。沢田氏に、きつくおこられた。私は深くお詫びをし、許しをこい、「二度とこの手は使わぬ」との約束で、その本はそのまま私にいただいた。この本のおかげで、三級、二級、一級と、とんとん拍子で強くなった。今でもこの本は大切にもっている。ポロボロになっているが。

その後、ご縁があり、本学に勤務させていただくこととなり、私達は、昭和52年9月、すなわち、鍼灸短期大学開学少し前に、園部に越して来た（めぐり合わせに感謝しつつ）。

それからの4、5年は、碁を打つことを忘れた。何かのきっかけで、園部に碁会所のあることを知り、時々碁を打ちにゆく機会を得た。

「本郷さんの碁は、勝つには勝つが、思想がない」。「碁というものは、一枚の絵を描かねばならぬ」。変な人がおられたものだ。このようなことを言われたのも初めてだし、聞いたのも初めてであった。そのころの私には、何のことを言っておられるのか、全くわかりませんでした。

縁あって、上記の変な人（竹中氏）に碁を打っていただいた時のことである。竹中氏曰く、「その石は、どういう目的で、そこへ打ったのか?」と。私は頭を強烈にガンとなぐられた。

そんな気がした。「この研究の目的は?」、「この授業の目的は?」とたずねられたような、そんな気がした。

碁とは一体何なんだろう?

今まで一体何をしてきたのだろう?

「碁は思想だ、碁は理論だ」。かって竹中氏の言われた言葉が、今になってようやくわかりかけたような気がするのである。

そして竹中氏より一冊の本をいただいた。増淵辰子著、「筋がよくなる『18のヒント』」という本である。私が碁について読んだ本としては、この本が二冊目であろう。この本のおかげで、碁が少し理解できるようになってきたと思っている。

最近になって、兄が「碁を打とうか」と言ってくれるようになった。あと一目、いや一目半(?)で兄と並ぶ。まだまだ遠い。しかし、あと少しだ。ガンバルゾ!!

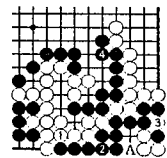
思うに、子供は親の壁に向って歩んでいるように思える。その壁は、打ち破ることのできないほど偉大な壁であらねばならぬだろうし、同時に、真の愛情のある壁であらねばならぬであろう。その壁を打ち破るためには、本人の努力はもちろんであるが、師からのアドバイスが大きな武器になるであろう。特に、その欲求に一致した適切な書物（自分で探し出す場合もあろうし、師より紹介される場合もあろう）を手に入れることが非常に大切であると私は思っている。

最近、私が手に入れた本のなかの一つに、碁の入門書がある。これから碁をはじめようとする学生諸君にそれを紹介した

い。その本は、趙治勲著、

「囲碁入門」、朝日出版社、¥980である。

世界に広げよう囲碁の輪、和、吾。



西洋図書館小史 (その六)

(承前)

一方、ドイツには前述のノーデの影響をうけた人に、单子論 (La monadologie) で有名な

附属図書館 八木克彦

哲学者ライプニッツ (Gottfried Wilhelm Leibniz 1646~1716) がおります。彼は1676年ハノーヴァー侯に招聘されてブルンスウィック

家の図書館に務めて、15年後にはウォルヘンビュッテル家 (Wolfenbüttel) の図書館長になっていますが、両館とも彼の尽力で立派なコレクションを持つことができ、特にウォルヘンビュッテル図書館においては、初めてアルファベット順の目録が作成され、早くから一般に公開されて学術図書館としての機能をもつに至っていました。

ライプニッツはその書翰の中で、同時代の人々が珍本や稀覯書を集めることに腐心していたときに、図書館は常に現代の科学や文学の流れと接触を保つために、年度ごとに安定した予算をもって、学術上価値のある新刊書すべてを規則的に収集すること、公開の時間を多くし、暖房・照明を良くし自由な貸出をひろげて利用しやすくすべきであると述べております。

彼の信条を最よく具現したのがゲッチンゲン大学の図書館です。この館はハノーヴァー選挙侯であったイギリス王ジョージⅡ世によって1734年に創設されたのですが、1812年にはすでに20万冊の蔵書を擁しておりました。初代館長のミュンヒハウゼン (Baron von Münchhausen) はライプニッツの主張に添って、学生や研究者の便を第一に考えて、あらゆる知識分野の書物を適正な選択を経て収納し、常に図書館は大学全体の本質にどのような影響を与えるべきかを考究しておりました。18世紀末にはマティエやロイスらの有能な司書によって目録も充分に整備され、この図書館のことは国中の誰もが承知しており、ゲッチンゲンの学者の成功は、この図書館のおかげであるとさえ言われたものです。

(1983年現在の蔵書は約 260万冊)。

ハイデルベルク大学図書館 (Universitätsbibliothek Heidelberg) ——西ドイツでは最も由緒のある大学図書館で1386年創設され、15世紀以降、選挙侯ルードヴィヒⅢ世、全V世、フレデリックⅡ世等の支援助で徐々に充実しました。

16世紀にはオットハインリッヒ選挙侯の宮廷文庫を併せて「ビブリオテカ・パラティナ (Bibliotheca Palatina) が作られました。30年戦争の際に大きな被害を受け、1622～3年には約8,500冊の写本や印刷本が戦利品としてヴァチカン図書館に送られて了いました。(うち約850の写本は1816年大学に返還された。) また、1693年の火災では大学のみならず街全体が大被害を蒙り、残部の蔵書も焼失しました。

大学は1803年に再興され、現在では図書館蔵書は220万冊以上にのぼり、そのなかには考古学・エジプト学・ヨーロッパ美術史に他にない貴重な資料を含み、美しいミニチュア画で有名な14世紀のマネッセ歌の本 (Manessische Liederhandschrift, Manesse Codex)、6,000冊の古写本、70万点にのぼる博士論文等々があります。

その他のドイツ (特に北部) の大学図書館では、土曜日の午後だけ開館するとか、冬は暖房の設備がないので閉めきっているとかで、総じて未発達の状態にあり、見るべきものはなかったようです。

ドイツに隣接するオーストリアでは啓蒙主義の皇帝ヨーゼフⅡ世によって、約2,000個所の修道院のうち 1,300個所が廃絶させられ、それぞれの蔵書は、ウィーン、フライブルク、グラーツなどの国の図書館に移されました。1775年マリア・テレジアによって新設されたウィーン大学の図書館も、修道院の図書を基本蔵書として発足しております。

イギリスではオックスフォード大学やケンブリッジ大学の図書館が17世紀に入って成長を始めます。

オックスフォード大学のメイン・ライブラリーは、実業家であり、且外交官であったボードリー卿 (Sir Thomas Bodley 1545～1613) に負うところが大きいです。この図書館はもともとヘンリーⅤ世の弟ハンフリー公の蔵書をもとに作られていましたが、ボードリーは官界から引退後、書籍の収集に専念し、当時寂れていた母校の図書館を再建して1602年に開館しました。新図書館は彼の功績を讃えて “Bodleian Library” と名づけられ、オックスフォード大学の図書館であると同時に、公共の図書館として学外にも公開されました。ボードリーは1610年にはロンドンの出版協会と献本協定を結び、また、多くの人から現物や金銭の寄贈をうけて、当館は17世紀中葉にはヨーロッパにおける学術研究の重要な拠点となったのです。

この図書館では当時冊子体の目録を作成していましたが、面白いのは、この館を利用する者は誰でも、この目録を購入しなればならなかったことです。

(この項つづく)



近着東洋医学系図書一覧（和書）

（昭和61年1月～12月収蔵分）

- | | |
|--|---|
| MR T仙骨無痛療法 初級
内海康満 エンタプライズ 昭60 | 新しい灸学 一その神秘を探る65年一
原志免太郎 医道の日本社 昭58 |
| 頭蓋骨調整法の診断とテクニック
脇山得行 エンタプライズ 昭60 | 脈診入門 一六部定位脈診法一
山下 詢 医歯薬出版 昭57 |
| 刺絡聞見録（東洋医学古典復刻叢書2.）
伊藤大助筆記 自然社 昭60 | 針灸経穴辞典
李丁他編・浅川要他訳 東洋学術出版 昭61 |
| 鍼灸臨床レポート
一臨床と経管プロジェクトチーム研究業績集一
芹澤勝助編著 医道の日本社 昭60 | 経絡治療のすすめ
首藤伝明 医道の日本社 昭59 |
| 鍼灸治療室 第1集～第3集
池田政一他 医道の日本社 昭60 | わかりやすい経絡治療 改訂増補再版
福島弘道 東洋はり医学会 昭61 |
| 鍼灸医学辞典
森秀太郎編 医道の日本社 昭60 | 脊椎のマニピュレーション
アーカート, I. A. 著 大竹信雄訳 医道の日本社 昭60 |
| 近世漢方治験選集 7～12
安井廣通編集解説 名著出版 昭60 | 漢方から生まれた美容の皮膚科学
佐藤好司 第一書房 昭60 |
| 中医臨床講座 (1)・(2)
神戸中医学会研究会編訳 燎原書店 昭57・58 | 中国 一科学と医療の諸相一
拓植秀臣 恒星社厚生閣 昭52 |
| 東洋医学を学ぶ人のために
山下九三夫他編 医道の日本社 昭59 | あん摩・マッサージ・指圧・鍼灸・柔道整復
精選試験問題解答集 芹澤勝助編著 医道の日本社 昭60 |
| 漢方用語大辞典
創医学会学術部編 燎原書店 昭59 | 開業鍼灸師のための診察法と治療法 2.
出端昭男 医道の日本社 昭61 |
| 定本経穴図鑑
芹澤勝助 主婦の友社 昭60 | 漢方臨床ノート 論考篇
藤平 健 創元社 昭61 |
| 弁積鍼道秘訣集
藤本運風 自然社 昭58 | 足の反射療法教本 一実技編一
吉元昭治他 医道の日本社 昭61 |
| 図解簡明鍼灸脈診法
藤本運風 自然社 昭59 | がんのセルフコントロール
一サイモントン療法の理論と実際一
Simonton o.c.他著・近藤裕監訳 創元社 昭60 |
| 図説東洋医学 経穴編
木下晴都他 学習研究社 昭60 | 中国漢方医語辞典
中医研究院他編著 中国漢方 昭58 |
| 難病の漢方治療
大塚恭男他 医学出版センター 昭61 | 鍼灸医学辞典
森秀太郎編 医道の日本社 昭60 |
| 鍼灸力学 一経絡の秩序と経穴力の研究一
馬場白光 續文堂 昭61 | 経絡現象 I・II
李定忠他編著 雄渾社 昭61 |
| 歯科臨床に即応できる
ペインコントロールとしてのツボ刺激療法
福岡明 日本歯科評論社 昭60 | 本草図譜総合解説 第1巻
北村四郎他 同朋舎出版 昭61 |
| 舌診臨床症例集 第1巻
三谷和合 自然社 昭57 | プライマリ・ケアと東洋医学
大塚恭男他編 誠信書房 昭61 |
| 図説バイ・デジタル・オーリングテストの実習
大村恵昭 医道の日本社 昭61 | 経絡学入門 一臨床応用篇一
藤田六朗 創元社 昭61 |
| 家伝灸物語
深谷伊三郎 三景 昭57 | 腎の現代医学的研究
姜春華他主編・森雄材他主訳 中国漢方 昭60 |
| 鍼術速成講座 初級向
杉山勲 三景 昭59 | 日本漢方の特質と源流
荒木正胤 御茶の水書房 昭61 |
| 臨床鍼灸医学
早崎芳 明治東洋医学院 昭53 | 井穴刺絡学 第三医学論文集
浅見鉄男 近大文芸社 昭61 |
| 東洋医学講座 11. 病症治療編(1)
小林三剛 謙光社 昭59 | 兵法系 経絡の原典
養内宗一編 永田社 昭61 |
| 漢方治療百話 一臨床五十年一第5集
矢数道明 医道の日本社 昭57 | 本草備要臨床百味 増訂版
汪昂著・寺師睦宗訓 漢方三考塾 昭61 |
| 漢方治療百話 一臨床五十五年一第6集
矢数道明 医道の日本社 昭60 | |



あとがき

諸先生方のご協力により、第6号も無事発刊の運びとなりました。お忙しい中、ご寄稿いただいた先生方に厚く御礼申し上げます。

なお、図書館長を勤めていただいた解剖学の武田教授が退官されます。永年にわたるご指導に心から謝意を表する次第です。

(K. Y.)